



今月の題字
石原めぐみさん

(みどり市大間々町)

大間々駅の南、昼はうどんと美味しいランチ、夜は居酒屋の「いし和楽」の若女将。素敵な笑顔が魅力です。店の入口にはいつも虹の架橋が貼ってあります。

窪塚書道教室新春作品展

足利屋では今年も大間々町の窪塚英華書道教室に通う子どもたちの作品展を開催いたします。期間は一月二日〜一月二十八日まで。今回展示する作品は、十一月三日から五日まで、富山県民会館で開かれた第五十四回日本北陸書道院展に出品した九点の作品です。「つぼみ」を書いた小学二年の永井大翔さんは「もつと字をきれいに書きたいです」。「月あかり」



を書いた小学三年の諏訪花怜さんは「大きな字でいいねいがんばりました」。「勝利の道」を書いた五年生の諏訪陽南さんは「文字を大きく書けるように頑張りました」。



小耳にはさんだ

いい話 (文責・靖) 《293》

井蛙 (せいあ) のつぼみやき

「今物は溢れ、たやすく手に入る」

旧黒保根村で教育長や黒保根民俗資料館館長などを歴任し、「黒保根の民話」で上毛文化賞を受賞された川池三男さんが「井蛙のつぼみやき」という随筆集を出版しました。本のタイトルは、「井の中の蛙大海を知らず」のことわざからとり、川池さんの謙虚で穏やかな人柄が伝わってくる八十五編の随筆の内容は読者の心に深く沁みてきます。

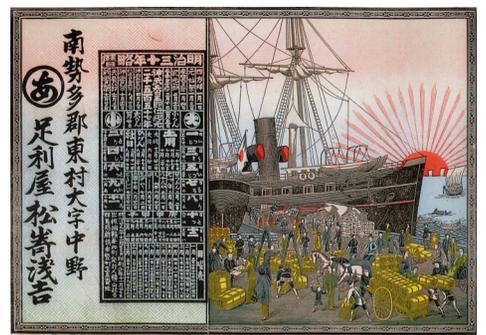
平成元年一月の黒保根小PTA広報『やまびこ』に寄稿した「うすれゆく『感謝』の心」という文章があります。今月は物が溢れ、たやすく手に入る... 井蛙 (せいあ) のつぼみやき

世界一小さな 足利屋

トイレ美術館

今月の作品《293》

松崎浅吉『明治30年の引札』



足利屋の初代・松崎浅吉は弘化四年六月六日に栃木県足利郡北郷村樺崎九百拾壹番地に生まれたという記録が戸籍謄本に記されています。浅吉は明治中頃、足尾銅山街道筋の南勢多郡東村中野(現みどり市東町)に店を構えました。明治三十年(百二十三年前)の正月に浅吉が配った引札(チラシ)には、帆船に荷物を積み込む横浜港の様子が描かれています。浅吉の三男・松崎友次は大正二年、二十二歳の若さで足尾鉄道の足利屋は今年、創業百七十年を迎えます。

靖ちゃん日記

令和元年十二月四日(水) 参観視察に参加した。「大嘗宮」の窓から神々しい日の出を拝んだ。十時に皇居到着。坂下門は長蛇の列。お濠や重厚な石垣を見ながらノロノロ歩く、こと三十分。おはしますか知らぬどもかたしけをえに涙こぼる」という歌を思い出した。昼は築地の「すしざんまい」。狭い通りは人で溢れていた。「三つで千内」という美人のオネエちゃんの声につられて、お土産を買った。「話め放題で千五百円」という若いオネエちゃんを目外合せて、また買った。帰りのバスでは高工会女性部の昔のオネエちゃんや、陽気にカラオケの音、気の弱いヤンちゃん、大嘗宮、気の弱いヤンちゃんは、オネエちゃんたちと目を合わせないように寝たふりをしていた。

ゴミ拾う真白き軍手初詣



毎月一日は、仲間と一緒に大間々駅周辺のゴミ拾いを続けています。二十年以上も続いているゴミ拾いは、一月元旦も例外ではありません。年のはじめの日の出前に大間々駅に集まり、真新しい軍手をはめ、ゴミ袋を持ち、踏切りを渡って、ながめ余興場、太鼓橋、高津戸橋のたもとを通り、神明宮の鳥居前で帽子と軍手を外して合掌、大間々駅に戻ります。そして、七時前に大間々庁舎の円形駐車場の「間々の土手」の上に移動して、初日の出を拝みます。毎年恒例の元旦ルーティーンは、幸せを実感する証しでもあります。

虹の架橋を検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第二百九十四号は二月一日(土)発行予定です。

やっちゃんの似顔絵提供: ひさかさん